

《コロナ禍での取り組み》

デジタルアーカイブサイトの活用と学生の活躍

令和2年4月7日、改正新型インフルエンザ等対策特別措置法第32条第1項の規定に基づき、緊急事態宣言が発出されました。

広島県内でも新型コロナウイルス(COVID-19)の感染が徐々に拡大したため、令和2年度前期に対面形式で予定していた公開講座や企画展示の一部は実施を断念することになりました。

広島県内における感染が収まりつつあった時期には、感染対策を十分におこない、対面形式の公開講座を再開しましたが、年末に再び県内の感染者数が急増したことから、令和3年に計画していた公開講座は中止することになりました。

(中止した事業の一覧)

日程	事業名	講師/担当者
令和2年 7月8日	宮島学センター公開講座 「紀行文から見た宮島の大鳥居」	秋山伸隆
令和3年 2月24日	宮島学センター公開講座 「厳島神社の舞楽装束」	鄭銀志
令和2年4月 ～ 令和3年1月	履修証明制度関連講座 「宮島学特別講座」	秋山伸隆、鈴木康之、 西本寮子、柳川順子、 大知徳子
8月～9月	学生による企画展示 「宮島大鳥居のみみつ」	大知徳子 「博物館展示論」 履修学生

県立広島大学では、前期の授業を原則オンラインで実施することとなったため、「宮島」を取り扱う授業科目のうち、「宮島学」(国際文化学科2年次配当科目)と「博物館展示論」(国際文化学科3年次配当科目)もオンラインで実施しました。

特に「博物館展示論」の授業では、15回の授業の中で、学生とともにセンターが所蔵する資料について研究し、毎年8月～9月に広島キャンパス図書館で企画展示を実施してきました。

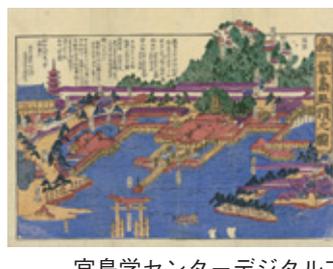
今年度は、はじめて企画展示の会場を宮島に移

して実施すべく春休み期間中から準備を進めてきましたが、緊急事態宣言の発出を受けて、学生や来場者の健康を第一に考え、断念することとなりました。

オンライン授業の光明となったのは、令和元年4月にセンターの開所10周年を記念して開設した「宮島学センターデジタルアーカイブサイト」でした。

このサイトでは、センターがこれまで収集してきた宮島の歴史や文化に関わる古文書(中世～近世)、古典籍(近世)、絵図(近世～近代)、絵はがき(近代～現代)等の高精細画像約300点を公開しています。

スムーズな操作で拡大し、肉眼では確認しづらい細部まで、閲覧することができます。



宮島学センターデジタルアーカイブサイト
<http://mjp.pu-hiroshima.ac.jp/mjarchive/>

「博物館展示論」を履修する学生たちは、自宅からこのアーカイブサイトにアクセスし、センターが所蔵する資料を一点一点観察し、細部に宿る魅力に気付くことができました。授業では、このサイトを利用して厳島神社の大鳥居の歴史について紹介する企画展示案や関連イベント案を作成しました。

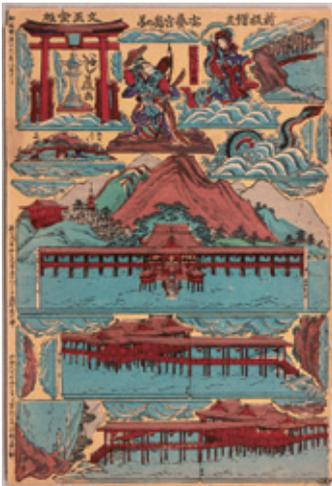
学生による提案

緊急事態宣言発出後、特に令和2年4月7日～7月1日までは、宮島島内の多くの飲食店や宿泊施設が休業されていました。感染症対策のため、宮島の社寺への参拝や旅行・観光を自粛された方も多かったことでしょう。

学生自身も不自由を感じる生活の中で、「新型コロナウイルスの感染が収束したら、ぜひまた宮島を訪れてほしい」という願いをこめて、様々な提案をしてくれました。

また、「ステイホーム、家でも宮島の歴史や文化に触れることができるものを作ろう」という前向きな気持ちで、企画展示を実施する代わりに、厳島神社の大鳥居の構造や歴史について学べる「大鳥居のひみつ」パンフレットや、歌川芳藤のおもちゃ絵（錦絵）「安芸宮島の景」をペーパークラフトとして復刻した「紙細工 安芸宮島の景」を製作しました。開発はオンライン（Microsoft Teams）を活用しておこないました。

学生による地域貢献 復刻版紙細工「安芸宮島の景」



左図は、歌川芳藤の「安芸宮島の景」です。この錦絵は、明治16年（1883）に刷られました。作者の西村藤太郎（歌川芳藤）は、歌川国芳の門人です。

この錦絵には、27個のパーツが描かれています。パーツを切り取って組み立てれば、厳島神社のジオ

ラマを作ることができます。

このような作品は「おもちゃ絵（立版古）」と呼ばれ、江戸時代後期から明治時代にかけて流行しました。「おもちゃ絵」が組み立て前の状態で現存するのは、大変珍しいことです。

「博物館展示論」の授業で、「安芸宮島の景」の魅力に気が付いた学生2名（綾目桃子さん、常久真司さん）から、「安芸宮島の景」の復刻版紙細工の製作と、企画展示への活用が提案されたため、宮島学センターの事業として製作することにしました。

学生との打ち合わせは、すべてオンラインでおこないました。Microsoft Teamsを利用した打合せには、印刷を委託した株式会社タカトーププリントメディアの統括営業部長山口剛氏にもご参加いただき、学生に印刷時の注意点や紙の特徴等についてご助言をいただきました。

特に、組み立て説明書を作成する際には、子どもたちが安全に作業することができるよう、文章を何度も校正し、掲載する写真の角度にもこだわりました。

廿日市市立宮島小中学校での組み立て実験

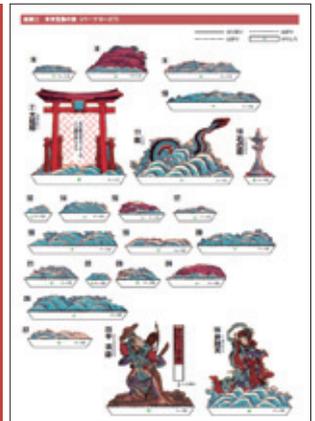
8月26日には、廿日市市立宮島小中学校にご協力いただき、同校の「宮島文化部」のクラブ活動の時間に、中学生による組み立て実験をおこないました。

学生はオンライン（Zoom）で参加し、教室で組み立てをおこなう生徒たちの様子を知る事が出来ました。

この実験により、ペーパークラフトの作成工程で、子どもたちが失敗しそうなところに気が付くことができました。これにより、道具の使い方や組み立て方の説明文を作成するためのヒントを得ることができました。



写真は宮島文化部の活動風景です。モニターにはZoomで繋いだ学生の姿が映し出されています。



完成した紙細工

宮島歴史民俗資料館企画展 「宮島の大鳥居～令和の保存修理～」 特別企画への参加

廿日市市立宮島歴史民俗資料館が実施する企画展「宮島の大鳥居～令和の保存修理～」では、本学の学生による特別企画として、「大鳥居クイズ」を実施しました。

このクイズは、「宮島学」や「博物館展示論」の授業で宮島について学んだ学生5名（綾目桃子さん、常久真司さん、時枝真暉さん、平井咲江さん、古山安優さん、いずれも国際文化学科3年生）が「子どもたちの想像が広がるような問題をつくる」ことを目標に作成しました。

作成した初級・中級・上級の3種類のクイズを企画展の展示室にて来場者に配布しました。

クイズに回答して下さった方には、先着160名に学生が開発した紙細工や大鳥居パンフレットを差し上げました。



期間中、197名の方にクイズに挑戦していただきました。中には、クイズを楽しみに、展示初日に駆けつけて下さった方もいらっしゃいました。東京都渋谷区にお住まいの小学校の先生は、このクイズや紙細工を学校に持ち帰り、平安時代を取り上げた単元で活用して下さったそうです。

この活動は、中国新聞（令和2年10月14日）、読売新聞（令和2年10月24日）、毎日新聞（令和2年11月28日）で紹介されました。

大鳥居パンフレットの作成

令和元年6月より、およそ70年ぶりの本格的な保存・修理工事をおこなっている厳島神社の大鳥居。

日没後はライトアップされており、工事の足場と覆屋が海面に反射して金色に光り輝きます。今しか見ることができない幻想的な光景が密かに話題になっています。

さて、宮島学センターでは、この機会に大鳥居の構造や歴史について学べる「大鳥居のひみつ」パンフレットを作成しました。

パンフレットには「大人向け版」と「子ども向け版」の2種類があり、「子ども向け版」は、令和2年度前期に実施したオンライン授業「博物館展示論」

を履修した国際文化学科の学生7名（3年生：綾目桃子さん・小川真穂さん・北代日菜子さん・常久真司さん・中島佑堅さん・古山安優さん、4年生：影山瑞季さん）のアイデアを取り入れて作成しました。

「大鳥居とアフリカゾウの重さくらべ」などトリビアを取り入れ、読みながら楽しく学べる内容になっています。

パンフレットに用いた可愛いイラストは、廿日市市立宮島小中学校で教鞭を取られた河下添ちどり先生（美術）の作品を利用させていただきました。現在は宮島観光協会の案内所や宮島歴史民俗資料館等で配布しています。



令和元年度「宮島学」

県立広島大学の前期授業は原則オンラインで実施することとなりました。そのため、前期授業「宮島学」（国際文化学科2年次配当科目）は、すべてオンラインで実施しました。

オンライン授業は、授業のテーマにあわせて担当教員が工夫し、Microsoft Teamsを利用したりリアルタイム授業や動画配信（YouTube）等の方法で実施しました。

当初は教員も学生も戸惑いながら進めていきましたが、パソコンの操作を得意とする学生が、戸惑っている学生に助言をする場面もありました。

また、オムニバス授業であるため、教員同士の情報交換は勿論のこと、ポータルサイトや個別メールのやり取りなどを繰り返し、学生へのヒヤリングも頻繁におこないました。

今年度は、教員と学生がお互いに支え合いながら、授業を作り上げていき、無事に全ての授業を終えることができました。

令和2年度の「宮島学」は、日本史、日本文化史、日本文学、考古学、中国文学、比較文化、イギリス文学などを専門とする教員が担当しました。国際文化学科2年生を中心に50名の学生が受講しました。

授業資料をパソコンの画面等に共有しながらおこなったリアルタイム授業を受講した学生からは、「普段の授業と変わらないと感じた」という感想も寄せられました。

講義		
5/11	初回ガイダンス、「宮島学」とは何か	大知 徳子
5/18	厳島神社の歴史	秋山 伸隆
5/25	平清盛の経済施策と厳島神社	鈴木 康之
6/1	厳島神社に伝わる舞楽	柳川 順子
6/8	厳島神社の舞楽装束	鄭 銀志
6/15	宮島の町の形成	秋山 伸隆
6/22	管絃祭の今昔	大知 徳子
6/29	厳島を訪れた人々ー平家の時代から江戸時代まで	西本 寮子
7/6	厳島神社と神仏分離	大知 徳子
7/13	外国人が見た明治・大正時代の宮島	天野みゆき
7/20	厳島神社の大鳥居	秋山 伸隆
7/27	戦争と宮島	秋山 伸隆

令和2年度 「宮島観光学(英語)」

予想だにできなかったオンラインでの開講。2年目の「宮島観光学(英語)」(3年次前期)の船出は不安に満ちていました。フィールドワークができないなかで授業をどう組み立て、どのように実践力をつけるか。不安に加えて難題が次から次へと降って湧きました。

しかし、もともとバーチャルガイドを含む構成であったことから、担当のウェバー先生はデータに音声を追加するなど教材づくりに時間を割いてくださり、お手持ちの資料やデータを授業内限定

で惜しみなく提供してくださいました。加えて受講生の語学力が高く、真摯な姿勢で取り組んだことも功を奏しました。現地でのガイド実践が叶わなかったのは残念でしたが、全回 Teams によるオンライン・リアルタイムで、効果的な授業が展開できたと考えています。

令和2年度 「宮島観光学入門(英語)」

令和2年度「宮島観光学入門(英語)」(全学共通教育科目・1年次集中講義)は、令和2年9月～12月に実施しました。

この授業では、毎年宮島の現地で外国人観光客に声をかけ、ガイド実践をおこなってきました。しかしながら、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大状況に鑑みて、授業の大半をオンライン授業(Teamsによるリアルタイム授業)に変更しました。

広島県内の感染者数が減少傾向であった11月1日(日)には、予定どおり宮島でフィールドワークを実施し、完成したばかりの「大鳥居パンフレット」を活用して、大鳥居の構造について解説する練習などをおこないました。



授業の最終回11月29日(日)には、県内の感染拡大が心配されていたため、ガイド実践を中止し、オンライン授業に変更しました。

オンライン授業に切り替えたことで、本学の留学生(大学院生、インドネシア)を招待することができ、より実践的なガイド演習をおこなうことができました。

令和2年度公開講座・講演会

宮島学センター公開講座

廿日市市教育委員会・廿日市市生涯学習推進本部と共催
第1回「中近世における宮島と大願寺」

日時：令和2年12月9日(水)14時～15時30分

講師：大知徳子

会場：サテライトキャンパスひろしま

受講者：30名

全国厳島神社参詣記⑫

鈴木 康之

福山市沼隈町常石 厳島神社

住所：広島県福山市沼隈町常石2631番地 祭神：市杵島姫命

今回紹介する厳島神社は、沼隈半島の南端に位置する福山市沼隈町常石にあり、敷名と呼ばれる港を見下ろす南向きの丘陵斜面に立地している。



厳島神社付近から、南方（瀬戸内海側）の田島を見た風景
(撮影地点の左後方が厳島神社)



厳島神社の鳥居



参道の藤棚

敷名は、瀬戸内を代表する港湾・鞆からおよそ5km西にある港で、500mほど沖には田島（福山市内海町）が浮かんでいる。沼隈半島と田島に挟まれた水道に面した交通の要所であり、江戸時代には福山藩の番所が設置されていたという。かつては敷名と田島を結ぶフェリーが運航されていたが、平成元年（1989）に内海大橋が開通したことにより、沼隈半島と田島は道路によって結ばれることになった。

平安時代後期には、小規模ながらも何らかの港湾が存在していたようである。源通親による紀行文『高倉院厳島御幸記』には、治承4年（1180）に厳島神社を参詣した高倉上皇が、厳島神社からの帰路、岸辺の松に藤の花房がかかっているのを船から見つけ、それを取りに行かせて歌を詠ませたという記事がある。『平家物語』にもその出来事が、具体的な地名とともに記されており、覚一本『平家物語』の「還御」では、高倉上皇が参詣するより前、後白河上皇が厳島神社を参詣した際に「しき名の泊」にすでに御所が造られていたが、高倉上皇はそれを利用しなかったとされている。また、歌を詠んだのは藤原隆季であり、

「千とせへん 君がよはひに 藤なみの 松の
えだにも かかりぬるかな」

という和歌とともに記されている。

社伝では、後白河上皇が参詣した際に祠が建てられたというが、明らかではない。いずれにせよ、『平家物語』の説話が広く浸透するなかで、現地における厳島神社への信仰が深められてきたものと考えられる。

藤原隆季の歌に詠まれた藤はもちろん現存しないが、厳島神社への参道には藤棚が設けられ、「敷名の千年藤」として現在も親しまれている。また、近隣の千年小学校、千年中学校という校名は、明治22年（1889）に常石村・能登原村・草深村が合併して成立した千年村によるものであるが、これも『平家物語』の故事にちなんで名付けられている。

（鈴木康之）

研究余録⑫

阿波からの来訪者—酒井弥蔵の旅日記
『出向かふ雲の花の旅』から

旅が盛んになった江戸時代中期以後、全国から多くのひとが厳島を訪れた。芭蕉を師と仰ぎ、俳諧と旅を好んだ阿波国半田の酒井弥蔵（文化5～明治25年（1808-1892））もそのひとりである。藍などを栽培して農業経営をする傍ら、出張代行業などを営んだ。俳号を春耕園農圃といい、いくつもの旅日記を残している。その弥蔵が厳島に立ち寄ったのは杵築神社（出雲大社）参詣の途上である。『出向かふ雲の花の旅』（徳島県立文書館所蔵〈サカイ00086000〉）には、旅程や滞在先での感動が句や歌とともに生き生きと綴られている。

旅立ちは嘉応2年（1849）3月11日のこととされる。金比羅宮を経て多度津から瀬戸内海を渡って鞆に上陸、阿伏兎観音を見て尾道へ。寺廻りと点在する芭蕉塚を訪ねながら三ツ口に到着した後、黒瀬の津江、熊野を経由して矢野から船で宮島に渡っている。詠えた船は船津屋、宿は大坂屋であった。

翌朝の参拝は大鳥居から。千畳敷を見て廻廊に入り、客人社、御本社を拝したあと大願寺を経て大元まで行き、神社の裏まで引き返して弥山に登ったという。白糸の滝、滝宮、眼洗薬師、三鬼神社などの名が見える。折しも桃花祭の最中で下山後はしばらく能と舞楽を見物。絵図2枚と楊枝百本を土産に買い、その日のうちに広島城下へ。潮の都合で江波で下船、塚本町の宿に入っている。ずいぶん駆け足のようだが、現代の観光ルートとほぼ一致していることがわかる。翌日は、ここまで来て錦帯橋を見逃すのは惜しいと、城下見物を

楽しむ仲間と一時別行動。途中、地御前から再び巖島を眺めている。

弥蔵が求めた絵図のうち1枚は「安芸國巖島社頭圖」。現在も徳島県立文書館に所蔵されている。記された名所との一致度が高く、旅の記をまとめるに際してこれを参照したと推測できる。安政3年(1856)になって書写したと思しい『伊都伎島由来』など、関連資料も併せて所蔵されている。

農閑期に思いを馳せて情報を集め、旅を満喫して帰宅した後、あるいはずっと後になって記録と記憶と絵図で旅日記を綴る。このような営みをする風流人は各地にいた。歴史に名を残した人物ではなく、各地の名もなき風流人の手になる資料や記録から庶民の旅の様相や時代の様相を垣間見ることができそうである。これらの資料には創作的色合いの濃い記事も見受けられ、虚実ない交ぜであるが、そこにながしかの真実が宿っているのも確かであろう。

たとえば行程に見られる疑問をひとつ。一行はなぜ三ツ口から二里を歩いて黒瀬に向かったのか。熊野あたりの名所を見たとはいえ、どう考えてもこの一泊は回り道である。

実は津江には代々俳諧に親しんだ豪農がいた。その地の同好の士を訪ねたのではなかったか。芭蕉を慕う風流人は全国にいる。没後、節目を迎える度に各地に作られた芭蕉塚を訪ねて先人を思い、同好の士と句を詠み交わし、親交を深めたのではなかったか。それも旅の目的、楽しみであろう。どこまでが事実でどこからが虚構なのか。旅日記をまとめた目的はなにか。未だ推測の域を出ないことも少なくない。ひとつひとつ資料を掘り起こして丁寧に読み、情報をつきあわせることによって浮かび上がってくる人々の営みがありそうである。

最後に巖島での農圃の詠を紹介しておこう。

「極楽も今や
弥山の花盛り」

「蛤の夢にはあらで
いつくしまけふぞ
霞のけしき見し哉」

『芸州巖島図会』巻三
(宮島学センター蔵)



(西本寮子)



宮島学センター所蔵資料の貸し出し

令和2年度は、広島城が企画された2つの企画展にセンター所蔵資料を展示していただきました。

①企画展「江戸時代の旅事情」(令和2年12月19日～令和3年2月14日)

この企画展示には、宮島学センターが所蔵する『続膝栗毛二編上下 宮島参詣』(十返舎一九、江戸時代)ほか15点を展示していただきました。

なお、この企画展は令和2年12月19日から開催される予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大を予防するため、初日から2月7日まで臨時休館となりました。展示期間は2月8日から14日までの7日間でしたが、公開を楽しみにされた多くの方が来場されました。

②企画展「広島かわいい大博覧会」(令和3年2月20日～4月4日)



画像提供：広島城

2頁でご紹介した歌川芳藤の錦絵「安芸宮島の景」を、紙細工と一緒に展示していただきました。

編集後記

宮島学センター通信第12号をお届けします。

コロナ禍で迎えた令和2年度。多くの事業が中止となってしまい、公開講座や企画展示を楽しみにして下さっていた皆様には、大変申し訳ありませんでした。

オンライン授業やリモート会議を経て開発したパンフレットや紙細工をお楽しみいただけましたら幸いです。学生たちとともに、宮島でお会いする日が来ることを心待ちにしています。(0)

編集・発行

宮島学センター通信 第12号

令和3年3月15日発行

国立広島大学宮島学センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号
TEL.082-251-9550

E-mail:miyajima@pu-hiroshima.ac.jp

ホームページ:

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/miyajima/>